

震災復興リーダー支援プロジェクト

Support our Disaster Recovery Leaders - Relieve, rebuild and re-start Japan

経過報告レポート (2019.3.12-2020.3.11)

Contents

- P.1 東北グローバルチャレンジ
- P.2 福島の食の復興応援ツアー
- P.3-6 第8回みちのく復興事業シンポジウム～2030年から見た東北～
- P.7-9 みちのく共創キャンプ2020
- P.10 東北オープンアカデミー (第5期)
- P.11 復興庁/ LV地域の動き (釜石・気仙沼・石巻)
- P.12 課題解決中MAP
- P.13 ご支援ご寄付のお願い

1

東北グローバルチャレンジ

本事業では、東北の“食”分野の復興に焦点を当て、J.P.モルガンのご支援のもと、NPO法人ETICと一般社団法人東の食の会でタッグを組み、岩手・宮城・福島の3県で、食に関する事業を行う農業・水産業・食関連企業（食品加工業や流通業等）の中小規模経営者約30社の海外事業展開をサポートし、次世代の海外挑戦の受け皿ともなるプラットフォーム作りを目的とします。

2019年8月9日、仙台にてキックオフイベントを開催。各生産者より海外進出にける想いが共有されるなか、各生産者から「1社単独で海外を目指すことに限界を感じている。ぜひみんなとコラボレーションしたい。」というニーズが多く寄せられました。このことを受け、本事業では地域や業種を超えて“チーム東北”としてブランディングし、チーム丸となって海外市場を開拓することで、風評被害を外から打ち破るとともに、拡大する海外市場の獲得を目指します。

2019年11月中旬、パリ・バンコクで体験型試食商談会を開催し、食関連のバイヤー・現地人シェフ等合計56名（関係者除く）に会場いただきました。試食商談会では、生産者から復興や海外進出にける想いがプレゼンされ、生産物の裏側に隠された生産者の想い・ストーリーをもって、東北の食をPRしました。また、参加者と共におむすびを結び、という新たな体験も提供しました。「初めておむすびを結びよ！」という人がほとんどのなか、北三陸のウニや福島県産のネギみそ等をおかずとして福島県産の炊き立てご飯を用いたおむすびを結び、こうした体験を通じて東北の食の質の高さを味わっていただきました。



また、パリの試食商談会に会場したバイヤー数名が仙台秋保醸造所のワインに非常に興味を持ち、2020年2月初旬に秋保ワイナリーへ来訪。それにあわせ“テロワージュ東北^(※)”と協働する形で国内の小売店等も招待し、秋保ワイナリーにて試食商談会を開催しました。東北の食を掛け合わせた和風フランス料理は、仙台秋保醸造所のワインや宮城県産の日本酒とペアリングする形で提供され、参加者は皆その美味しさに感動し、最終的に、フランス人バイヤーと株式会社仙台秋保醸造所は2020年中にワイン数千本の輸出契約を結ぶことを目指し、現在も継続的に商談を進めています。このように海外での現地試食商談会や現地物流会社や卸企業等と個別商談会を行う等、新たなネットワーク作りを進めると共に、日本国内での商談会等様々な機会を通じて、“チーム東北”の食の豊かさや質の高さをPRし、ファンを増やし、海外販路を開拓していきます



(※) 『テロワージュ』とは：

「気候風土と人の営み」を表すフランス語「テロワール(terroir)」と「食とお酒のペアリング」、「結婚」を表すフランス語の「マリヤージュ(mariage)」を組み合わせた、仙台秋保醸造所のオーナーである毛利氏が発案した造語。

2020年2月1・2日（土日）、福島の食の復興応援ツアーと題して、福島市、相馬市、会津若松市を巡る企画を実施。福島から世界を目指す生産者たちを東京のメディア・教育・官公庁関係者等10名ほどで訪問しました。

・相馬市（報徳庵、飯塚商店）

相馬市内の仮設店舗の食堂「報徳庵」では、店主で復興支援センターMIRAI所長の押田一秀さんから浜通りの現状を伺いました。直接の原発被災地域ではないが、漁獲制限や農作物の出荷制限により、負のイメージの定着で観光資源喪失など厳しい側面がある一方、ランチの超肉厚な地物タラフライや、平飼卵「相馬ミルクエッグ」などを通じて、頑張る生産者の姿が感じられました。有限会社飯塚商店では、仲卸・加工業を営む飯塚哲生さんから、県内飲食店への販路拡大と、海外進出を目指すお話を聞きました。



・福島市（ももがある、カトウファーム）

震災後にUターンし、格安で取引される樹上完熟桃を瞬間冷凍し付加価値をつけた商品「ももふる」を開発、国内外で展開する株式会社ももがある代表の齋藤由美子さんの加工場と店舗を見学。その後、ホップ栽培とビール醸造も新たに手がけるコメ農家、株式会社カトウファームを訪問。醸造所となる予定の小屋で加藤晃司さん、絵美さんのお話を伺いました。近所の方も気軽に飲みに来て欲しいとガラス張りの広間に大きなテーブルも設置されています。



・会津若松市（コリーファーム、ファーム大友）

農家の13代目として、26haもの農地でコメ、アスパラ、ネギ、会津伝統野菜などを栽培するコリーファームの佐藤忠保さんのネギ畑ではネギ収穫体験。収穫したての極太ネギ焼のとろける甘さに舌鼓。ファーム大友では、奥さんの実家の200年続いたトマト畑を引き継いだ大友佑樹さんの加工場を訪問。トマト嫌いだからこそ自分が食べられる美味しいトマトづくりへの思いを聞きました。



夜には福島駅前の「サイトウ洋食店」で生産者の皆さんの食材を使った食事会も実施。参加者はもちろん、生産者同士の交流も深まりました。世界を目指す福島の生産者にぜひ、ご注目ください。

第8回
みちのく復興事業
シンポジウム
「2030年から見た東北」

日時：3月10日(火) 15:00～17:30
場所：オンライン開催 ※ZOOMを使用

2030
年から見た
東北

開催概要

- ・開催日時：2020年3月10日(火) 15:00～17:30
- ・開催場所：オンライン開催 ※ZOOMを使用
- ・参加人数：180名
- ・URL：<https://www.etic.or.jp/sympo200310/>

<イベントの概略>

2013年から年1回開催されているシンポジウムで、今回で8回目となりました。震災後の東北では、これまでと違う価値観で豊かな暮らし方を求め、持続可能な地域社会をつくらうとする取り組みが数多く生まれました。10年後のSDGs達成の期限でもある2030年からみると、都市部よりもむしろ東北の方が、予測困難なこれからの社会へのヒントと希望に満ちた実験場ではないか。本シンポジウムではそんな認識に立って、東北の実践から生まれた“未来の兆し”について考察すべく開催されました。

<プログラム内容>

第1部 基調講演「2030年の経営」

早稲田大学 大学院経営管理研究科 教授 入山章栄氏

第2部 ショートプレゼン「2030年の〇〇は？」

「2030年の食べる」

漁業生産組合浜人/一般社団法人フィッシャーマンズジャパン代表 阿部勝太氏

「2030年の暮らす」

一般社団法人日本カーシェアリング協会 代表理事 吉澤武彦氏

「2030年の働く」

合同会社巻組 代表 渡邊亨子氏

第3部 ディスカッション「2030年妄想会議」

第2部プレゼンテーション登壇者

株式会社BIOTOPE CEO/チーフストラテジックデザイナー 佐宗邦威氏

株式会社エンブリック代表 広石拓司氏

モデレーター/NPO法人ETIC代表理事 宮城治男

● 開会の挨拶

みちのく復興事業パートナーズ事務局の貝沼航より、今回の趣旨説明、新型コロナウイルスの影響によりオンライン開催になった経緯の説明、ZOOMでの参加方法等の説明を行いました。

● みちのく復興事業パートナーズの紹介

NPO法人ETIC、山内幸治より、事業の紹介を行いました。本事業は「2012年6月、東北の自立的な復興に寄与するべく現地のリーダーを支援する」という目的のもと発足しました。

2013年より始まった年一回のシンポジウムも今年で8回目となり、今回のテーマ「2030年から見た東北」は非常に大きなテーマですが、東北の中に未来を考えるためのヒントがあるのではないかとすることを参加者の皆さんと考えたいという趣旨をお話しました。

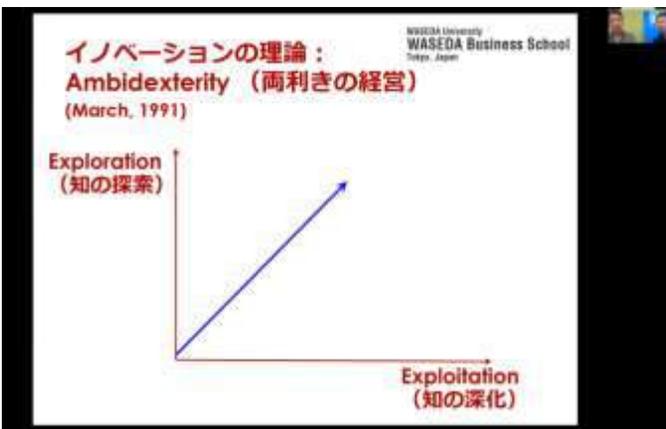


● 第1部：基調講演

『2030年の経営』と題し、早稲田大学大学院経営管理研究科 教授 入山章栄氏よりご講演いただきました。

まず冒頭に入山氏から「2030年の話をするのであれば、2050年のことを考えましょう」という提案がありました。なぜなら、2030年というのは近すぎてすぐに来てしまうこと、10年後は何となく想像がついてしまうことにより面白く飛躍したアイデアが出にくいという理由があり、今回も想像がつかないくらいの30年後くらいまで思考を飛ばして議論した方が良いのではないかと投げ掛けでした。

また、どのようにイノベーションは起こるのかという題目については、Schumpeterが1934年に発表した「イノベーションの本質は知と知の組み合わせにある」という言説を引用されました。



その上で、【遠く幅広く見て自分の認知の視野を広げる探索の行為 = 知の探索】がイノベーションにとっては重要であり、【そのたくさん得た知の中から収益化できる部分を追求していく行為 = 知の深化】とのバランスが非常に重要であるが、人間の認知には限りがあり、目の前で既に組み合わせさせた知だけに囚われ“知の深化”に偏りがちだという指摘をされました。しかしながら、震災後に多様な人々が入ってきた東北においては、まさにこの“知の探索”が随所で自然と行われる環境となり、今東北でイノベーションが起きている理由であり、2030年の経営という観点でも、ポイントはいかにこの知の探索ができるかにかかっているとお話いただきました。

そのためには何を行えば良いかという点では、①人材の多様化（組織ダイバーシティ）②イントラパーソナル・ダイバーシティ（個人内の多様性）が必要不可欠であり、人が動き新しく繋がり、知と知が新しく組み合わせることが重要だと提言いただきました。また、知の探索を進めるには目の前の事象やビジョンに対して腹落ちできているかということが非常に重要だとお話いただきました。

最後に、そもそも目的のないビジネスや遠い未来に“腹落ち”するために昨今のSDGsのような目的が求められ必要となってきたというお話や、企業や社会はより一層「自律分散型」になっていく必要があるという提言があり、基調講演を締めくくっていただきました。

● 第2部：ショートプレゼンテーション

東北で活躍するお三方をお呼びして、それぞれ活動紹介のショートプレゼンを行っていただきました。以下、活動内容詳細は割愛し重要なポイントを抜粋でお伝えします。

・『2030年の食べる』一般社団法人フィッシャーマンジャパン代表 阿部勝太氏

宮城県石巻市において2014年に発足以来、行政や漁協と連携しながら一貫して水産業に携わる人材の育成や海の資源を守ることに従事していらっしゃいます。

・『2030年の暮らす』一般社団法人日本カーシェアリング協会 代表理事 吉澤武彦氏

宮城県石巻市において2011年に発足以来、寄付車で持続可能な優しい社会をつくるための3つの事業（①コミュニティ・カーシェアリング②ソーシャル・カーサポート③モビリティ・レジリエンス）を行っていらっしゃいます。

・『2030年の働く』合同会社巻組 代表 渡邊享子氏

宮城県石巻市における2014年の創業以来、“出る杭”になり得るような人材を地方から育てていくべく、大量生産消費型社会では無価値とされる資源（空き家）を再価値化して、アート思考的な人材や社会的マイノリティの人々に価値を提供していくことでイノベーションを起こしていこうとされています。

最後に入山氏からは、「震災直後の東北には“東北をなんとかしなければ”という思いで入った沢山の社会起業家がいたと思うが、社会問題解決のためだけに入ると持続可能性は低く、むしろやっていることが楽しくて持続可能性がある。そういったところを垣間見ることができて、非常に素晴らしいプレゼンテーションだった」と講評いただきました。

● 第3部：ディスカッション

『2030年妄想会議』と題して、第2部のお三方に加えて、株式会社BIOTOPE CEO/チーフストラテジックデザイナー 佐宗邦威氏と株式会社エンパブリック 代表 広石拓司氏をお呼びし、NPO法人ETIC代表理事 宮城治男をモデレーターにディスカッションを行っていただきました。



まず冒頭に宮城からお二人を「未来を展望していく哲学的な立場でもあり、何よりも実践者として様々なことを仕掛けられてきた」とご紹介し、お二人からこれまでの感想も兼ねて2030年を展望するお二人のお考えについてお話をいただきました。

エンパブリックの広石氏からは、お金を稼ぐだけでなく、誰に対してどのように役立つのかという手応えや、ただ消費するだけではない“最高の仕事”を顧客や社会との対話を通して地域から生み出してほしいという提言がありました。そして世界をどう次のバージョンにしていくかがSDGsの大きなテーマであるが、それに向けた様々な活動や取組においても東北というのは最先端をいっていると感じると述べられました。

そしてBIOTOPEの佐宗氏からは、地域分散型になった時に内発的なものから新しい文化が生まれてくるが、文化というのは何度でも再生産・再消費が可能なもので非常に持続可能なリソースの一つであり、これからの時代の幸せや個人の充足感を考える上で人間の営みとして大切な鍵となり、文化創造をできる人間の思考法（OS）にいかにかアップデートしていけるかがクリティカルなポイントだとお話いただきました。

また、2030年というのは広石氏が述べたような世界観を実際にどのように実行していくかという方法論の世界であり、ビジョン像を議論するフェーズではないともお話をいただきました。

次に第2部のお三方も加わり、宮城からの「東北という場は未来を考えさせられる場所であるし、考えたい場所であるが、改めて2030年を意識した際にこんな風に東北の良さを活かせるのではないかとこんな風に企業と繋がっていくことでお互いの可能性が広がるのではないかと、感じていることを教えていただきたい」という問いに答える形で議論が進行しました。

吉澤氏からは「石巻で感じたのはコミュニティの底力で、人と人の関係で大抵の問題はクリアできることがわかった。今後はやはりテクノロジーがそれを更に引き出すことを期待している」とコメントいただきました。



渡邊氏からは「企業に所属してミッションを“自分ゴト化”してそれを自分なりに思考するのが働くということだと思うが、今は働くということ自体が供給されてしまっている。働くということはそもそも生産的でクリエイティブなことだったはずが、働くということやその環境が用意されていてそれを“消費”していく形になっている。ミッションの自分ゴト化が進まない限り、どんなに働き方を形式的に変えたとしても日本の生産性は良くならないのではないか」

また「日本の教育機関や就職の一括採用方式など、そのサイクルには乗ってこない部分をどう変えていけるかという部分が首都圏と地方の関わり方において重要になるし、それを共感していけることがこれからの日本の生産性やクリエイティビティに繋がっていくのではないか」とコメントいただきました。



宮城の「都会からすると非日常の典型的な場所である漁師の現場でご覧になっていて、体験にいらっしゃる方や協力してくれる方々との触れ合いの中で何か感じることはあるか」という問いに対し、阿部氏からは「閉鎖的だった漁師の世界も震災を機に同業種・異業種・他地域の方々が沢山入ってこられたおかげで、何十年分進んだのだろうというくらい変化があった。今まで水産業に関わりがなかった方々どう関わっていくかが、これからの水産業の持続可能性にかかっている」とコメントいただきました。



そして広石氏からは「Lynda Gratton氏の著書『LIFE SHIFT』の中でこれからは“無形資産”が大事で、中でもどんどん変わっていくためには“変身資産”が重要だと書かれているが、変身資産の中で一番重要なのは自分を知ることだと言われており、自分が何を好きか、自分は何をしたいのか、自分をどれくらい知っているのかというのが変化に対して向き合う力になると唱えている。

そして自分を知るには他者と出会うことしかないし、会議室からはイノベーションは起こらない。必ず現場に足を運びそこで見聞きしたこと・感じたことから議論を進めることが重要だ。それを行えるのが東北であり、その他にも日本各地で災害が起きている地域に実際に企業が赴き考え直すということが大事ではないか」とお話をいただきました。

そして、宮城から東北のお三方に対して、未来を展望していく上でこんな形で一緒にできると面白い、こんな風に関わってほしいなどお考えをお聞かせいただきたいと投げかけ、思考をアップデートすることの重要性、企業に働きながらも思考できる人材を育てることの重要性、沢山の人が関わることで視野が広がり問題を解決していくことができること、パートナーシップでそれぞれがその時できることを持ち寄って実行するという極めてシンプルなこと等、様々な視点でお答えいただきました。

最後に、広石氏と佐宗氏から全体に関する講評をいただき終了となりました。

● 閉会の挨拶

貝沼より閉会の挨拶にて、誰でもできる関わり方として「知の探索として東北に行く」ということの大切さも感じたディスカッションとなったと述べました。

最後は、電通ボランティア社員の皆さんが制作された映像『つながる日』を上映し、閉会となりました。

※動画は下記URLより視聴可能です。
<https://tsunagaru-311.jp/>



開催概要

- ・開催日程：2020年1月17日(金)～18日(土)
- ・開催場所：岩沼屋（宮城県仙台市）
- ・参加人数：80名
- ・URL：<http://michinokubuc.mystrikingly.com/>

●みちのく共創キャンプとは？

東北で社会課題や地域おこしに取り組む起業家やリーダーが集まり、お互いの地域や取り組みについての理解を深めるとともに、現在の事業や新規構想について意見交換を行います。共創の名の通り学び合うだけでなく、共同の事業を創り出していく場でもあります。

昨年度は主に岩手、宮城、福島から54名参加のもと開催され、様々な具体的なアクションが話され、キャンプ終了後も互いのフィールドを歩き来する 取り組みが10本生まれました。今年度は秋田県や 山形県からの参加もあり、昨年度よりもさらに高い熱量を帯びたキャンプになりました。

ここからは、当日の様子を紹介していきます。

●開会・オープニング

昨年度のキャンプに参加していない人が半数以上を占めていたこともあり、事前に資料を見たもののどんなことを話すのか、2日間どう過ごすのか、少々そわそわしている様子の参加者へ運営からキャンプの趣旨と実施内容の説明を行います。



主催者側から、「このキャンプを、普段はそれぞれの地域の社会課題や地域にとって必要な取り組みをしている皆さんが一堂に会して、お互いに励まし合ったり、事業のアドバイスをし合ったり、新しい何かを一緒に作り合ったりして「魂を分かち合っていく場」として活用してほしい」といった趣旨の挨拶がありました。また昨年の参加者から昨年のキャンプの感想やその後のアクションについての紹介があり、初参加の人も趣旨をつかんでいる様子でした。

その後、会場内で自己紹介し合うアイスブレイクを行い、地域背景理解WSの時間が始まります。

●地域背景理解WS



この時間は広い東北から集まり、初めて顔を合わせる人も多数という状況で、すぐに参加者同士で互いの取り組みについて話を深めるのも難しかったという昨年の反省を踏まえてお互いの地域の現状を情報共有するものとして実施しました。

県ごとにテーブルを分け、参加者それぞれが活動している地域や周辺部のホットな情報や課題と思われることを出し合い、その後、会場全体で各テーブルで出された情報を共有しました。

東北としてだけでなく、同じ県内でも知られていない取り組みや地域の状況を共有することができました。また、会場全体での情報共有で深く聞けなかった内容に対して興味湧き、詳しい話を聞いてみたいという気持ちが醸成されたことで、その後のキャンププログラムがさらに濃いものになる時間となりました。

●リーダー相互相談会

昨年に引き続き今回のキャンプでも中心となるプログラムとして相互相談会を実施しました。

なお、昨年は相互メンタリングとしてテーブルごとにメンター1名とメンティー2組にスタッフ1名が加わる形式で実施しましたが、今回はテーブルごとに3人1組で座り、相談する側と相談される側を順番に交替して、相談事に対してそれぞれの視点から助言や協力できること等を話す場に変えました。

その結果、昨年よりもテーブル内のひとりひとりが相手の相談内容へのコメントを考える心構えができて、各自の視点や取り組みをもとにした回答や対応方法について話されていました。



相互相談会は2日間を通じて4回(1回あたり25分×3組)設けており、毎回のテーブル内の組み合わせも変わるので、新しい意見や考え方を出し合うことで、持ち込んだ新しい事業やアイデアに向き合い、参加者同士でより良い方法や取り組みを考える機会になりました。

●テーマ別分科会

夕食でお酒を交えて親睦を深め、初日の締めとなるテーマ別分科会に入ります。



キャンプ参加申込時に分科会で共創キャンプの参加者と一緒に深めたいテーマを提示してもらっていました。そして、分科会冒頭に提示した本人からその内容について説明してもらい、他の参加者は自分が興味を持ったテーマのテーブルに集まり議論しました。

提示されたテーマは「行政との連携や意識改革にむけてできることは？」、「地域の生きづらさについて」といった地域での活動を進める上でハードルに感じることなど17のテーマが上げられました。議論は笑いもあり、時にまじめに行いました。地域の生きづらさについての議論ではテーブルに集まった全員が共感が生まれていて、ひとりだけの悩みではないことを確認できた様子でした。

●地域FWアイデアセッション

キャンプ2日目は午前中に相互相談会を行い、初日の結果も踏まえた相談がなされていました。昼食を挟んで、キャンプ最後の企画となる地域FW(フィールドワーク)アイデアセッションを行います。この企画では、各自でキャンプの参加者と一緒に取り組みたい企画を書き出し、自分の考えと近い人同士でグループをつくり、ワールドカフェ方式で議論を深めました。



アイデアセッションにより生まれたネクストアクションは10近くあり、東北オープンアカデミーで実施予定のものが6つ生まれました。

●クロージング

今回のキャンプを通して「次回のキャンプまでに実施したい取り組み」をひとりひとり書き出しキャンプのまとめとしました。

地域や取り組みを超えた新たな取り組みも相互相談会やアイデアセッションにより生まれ、初めは戸惑っていた人も、2日間を共に過ごし、自分のことをさらけ出し、考えを深めたことで、「メールとかで次に向けた打合せをしよう」「実際に活動している様子を見に行きよ」と言ってそれぞれの場所に帰る姿が見られました。

●おわりに

参加者の感想から、「いろんな人と出会えました。アクションを実行することになりました。」「予想外の視点からの意見、内省のきっかけをもらった。」等のコメントが寄せられました。

今後も東北のリーダー間で交流し学び合う場面をつくることに加え、今回の参加者の出会いから新たな取り組みが生まれて続いていくことと思います。

なお、今回から東北の団体での継続的なキャンプ開催を目指して運営委員会方式として昨年の事務局に岩手、宮城、福島県の3県の運営委員を加えて実施しました。



2015年に始動した東北オープンアカデミーも2020年度で一区切りを迎えます。最終年度を前に、2019年度においては、通算81件のフィールドワークに、延べ395名の方に参加いただける場となりました。東北に関わる新たな仲間を募る場としてスタートし、今ではどの地域よりもリーダーシップ密度の濃い東北各地での実践の場を、東北内のリーダーの間で訪問し合う機会（フィールドワーク）として活用いただいています。

2021年には、震災から10年の節目も控え、ますます東北にはこれまでの知見や挑戦でつながった人々による多様な分野での先鋭的な取り組みが伝播していくと思われまます。ひきつづき、多くの実践者の皆さんと、これからの東北について語らい、挑戦していく機会がもてればと考えています。



■ 2019年度 第5期 企画 10件
(台風19号の影響による実施の見合わせ 1件を含む)

- 1) 現場被災地域・ホンネザダンカイ ～福島創生の原点・浜通りに集結し、未来創りを続けよう@福島県葛尾村
- 2) 東北で人が育ち、活躍する仕組み作り
～地域おこし協力隊を軸に～@岩城県丸森町
- 3) 寺社がギフトする未来～千年藝術の森とは～@岩手県一関市
- 4) どうする！？唐桑半島@宮城県気仙沼市
- 5) 生きづらさを抱える人をリカバリーする地域@宮城県石巻市
- 6) ウニの町が創る。地域商社の仕組みと八戸の巨大朝市
@青森県八戸市・岩手県洋野町
- 7) 暮らし方の多様性が集落にもたらす変化と可能性
～十和田湖の大自然の中で～@青森県十和田市
- 8) 東北リーダー七転び八起き
～失敗から学び合う成功への道～@福島県浪江町
- 9) 地域経営を考える ～「女川データ事業」と「活動人口創出事業」～@宮城県女川町
- 10) 新世界への修学旅行～大人版～@山形県朝日町



※2020年度(第6期)は間もなく公開予定です。

(株)日本総合研究所が事務局として行う復興庁事業の集合研修部分をETICもご一緒しました。岩手・宮城・福島から全8団体が参加。まずは仮説を作り、3年後の目標にむけ、今年度末までの行動計画をたて、コーディネーターが毎月伴走していくスタイルで行われました。3月に予定していた最後の研修はコロナウイルス感染症の影響で中止となりましたが、期間中、仙台、郡山での集合研修の他、長野県茅野市、秋田県五城目町へのフィールドワークを実施。茅野市では観光地づくりから観光地域づくりへ。観光を起点に持続可能な地域、社会を作るまちづくりの実践を学びました。また、五城目町は教育環境を世界につなぐべく、関係人口を活かしながら住民主体の垣根をなくしたまちづくりが進んでいました。両地域とも肩臂張らず、ビジネスモデルも濃淡をつけつつ、多様なステークホルダーが楽しめる仕組みを作っている点など、参考になりました。実践者たちが集まるからこそこの話題も多く、このような場の大切さを改めて感じる機会となりました。



7 ローカルベンチャー協議会

地域の動き

<https://initiative.localventures.jp/>

【気仙沼市】

気仙沼市での地域おこし協力隊×右腕プログラムでは、2016年より「気仙沼地域エネルギー開発株式会社」「気仙沼まち大学運営協議会」「一般社団法人 気仙沼地域戦略」「気仙沼水産資源活用研究会」「一般社団法人まるオフィス」の5つの団体に計9名の地域おこし協力隊が着任。それぞれ活動を行い、任期を終えて市内で新しいチャレンジや事業に踏み出す方も出ています。2019年にはNPO法人 ETICが主催する「ローカルベンチャーラボ」に協力隊1名が参加、市内での事業構想を磨き、2月には気仙沼市内のイベントにて事業プレゼンを行いました。2020年度は協力隊を卒業する千葉氏が「ローカルベンチャーラボ」にてファシリテーターを担うなど、新しい動きが広がっています。

【石巻市】

石巻市地域おこし協力隊×右腕プログラムは、2019年度は事務局機能を合同会社巻組に移管して実施しています。東京、ドイツ、仙台から3名の隊員が着任し活動中です。

● 武井友佐さん・公益社団法人3.11みらいサポート

東京都調布市出身。高校在学中に石巻を訪れ、人の優しさに惚れ込み、高校卒業と同時に協力隊として石巻に移住。震災伝承を通して石巻のPRに取り組む。



● 佐々木悠介さん・農業生産法人 株式会社 田伝むし



宮城県遠田郡出身。ドイツから妻子とともに移住。現代美術家として活動しつつ、震災時のボランティアを機に、故郷の復興のために役立ちたいとエントリー。無農薬栽培のササニシキ作りに奮闘中。

● 草野源太さん・株式会社 海遊

宮城県仙台市出身。デザイナーとして関わった事業に本腰を入れたい、復興に携りたいと、自らの豊富な営業経験を活かし、牡蠣の販路拡大と日々活躍中。



【釜石市】

地域おこし協力隊制度を活用し2017年6月にスタートした「釜石ローカルベンチャー(LV)コミュニティ」1期生も3月で3年間の期間を満了。全員が釜石で独立することが決まり、市長へ成果報告を行いました。4月からは釜石LVや地域おこし企業人によって始められた事業の更なる推進のため、新たに2名が着任します。

● 釜石ローカルベンチャー（2期）

神脇隼人さん

大手企業でのキャリアを離れて釜石LVを選んだ神脇さん。シャッターの降りた商店街を前に、「可能性しかない！」と仲見世を舞台に活動することを決意。稼働店舗0だったところへコワーキング、カフェ、ゲストハウスをオープン。まさにゼロからのまちづくりを始めた。



地域パートナーとなる釜石大観音リノベーションプロジェクト代表で一級建築士の宮崎達也さんと出会い、「場づくり」「モノづくり」の2本柱を立て、着任から5か月で会社設立。イベントの企画やカフェの直営などを目標にクラウドファンディングにも挑戦。

『仲見世がどんなエリアになっていくかは集まってくるプレーヤーで決まる。何かをしたい、という思いを実現できる場所にするためにも、まず僕自身が仲見世の集客装置になりたい』『画一的なキャリアではなく自分らしい生き方を試行錯誤する人の背中を押すロールモデルになりたい』という思いも持っている神脇さん。

最近注目されている起業や複業という新しい働き方を自ら実践しながら、その姿を釜石から発信していこうとしています。

岩手県

野田村をみんなのホームに ～誰もが「ただいま」「おかえり」でつながる村～

NPO法人 のんのりのだ物語



住民、出身者、訪れる人、野田村に関わりを持った誰もが、野田村で「ただいま」「おかえり」と言い合える関係づくりに取り組んでいるのが、NPO法人のんのりのだ物語です。野田村は古くから、のだ塩の産地として知られており、周辺の内陸部との交通の出発点として行き交いのある地域です。のんのりのだ物語は東日本大震災を契機に設立し、野田村を訪れる人が将来も関わる人ことができるようにするため、民泊の受け入れ事業から始まり、現在は村民との交流をきっかけとしたファンづくり、村民がやりたいことを実現するための支援、村の魅力発信などに取り組んでいます。村民のひとりひとりが自分のやりたいことを実現することで野田村でも出来る事があると体感するだけでなく、村外の人も興味を示す取り組みになることで訪れるきっかけにもつながり、それぞれの行動が野田村をふるさとと思える関係づくりに結びついていく未来に向かって活動しています。

育てる地域、育つ人

NPO法人まちサボ零石



「地域住民が主体となり今以上に良い地域をつくる」として全国各地で様々な取り組みがなされています。岩手県零石町でも5年前からその取り組みを始めていて、住民と行政の潤滑を担う中間支援組織としてNPO法人まちサボ零石は取り組んできました。町民が主体として地域で活躍するために、地域づくりを体系的に学べる機会を設けるべく「地域づくりカレッジ」という住民向けの講座を開催し、活動を行う際のスタッフとしての参加以上に活動をマネジメントする方法を発信してきました。また、商業面でも新たな仕掛けを生み出すために零石町内でお店をやりたい、自分の趣味や作品を活かした商売をやってみたくて考えている人向けに「創業支援セミナー」を開催し、一般の住民でも起業や創業への心理的なハードルを下げることに努めてきました。零石町の町民、企業、行政が自分たちの役割を活かしたまちづくりの実現に向けて取り組んでいます。

宮城県

羊を通した地域課題解決と安心して暮らせる地域づくりを

NPO法人さとうみファーム



ボランティア活動で2011年4月11日に宮城県気仙沼市に入り、同年8月には任意団体として南三陸町にてさとうみプロジェクトを立ち上げ、子どもの遊び場づくりをはじめ様々な活動を行ってきました。その後活動を続ける中で、震災からの復興と地域課題解決のためには収益事業を行い活動を継続する必要性がありました。

そんな時、オーストラリアの塩害にさらされた土地に生息する、ソルトブッシュというミネラルを豊富に含んだ植物を食べて育つ上質な「ソルトブッシュヤム」の存在を知り、南三陸町沿岸部で塩害を受けた地域でも同じように羊を育てることができるのではないかと考え、飼育を試みしました。さらに、三陸産高級わかめの未利用部分を食べさせることにより、地域の未利用資源も利用する新たな循環を生むことにも成功しました。今ではブランド羊「わかめ羊」として年間30頭ほど出荷しており、首都圏の高級レストラン等で提供されています。

モバイルモジュールを活用し、まちの中にワクワク ドキドキが溢れる居場所を創りたい！

Bī ba



「循環型のまちづくり」が積極的に行われている南三陸町で、「循環」をテーマにケンチュウを使ってプロダクトの開発と、それを活用した場づくりに取り組んでいます。具体的には、三陸の森と海の文化に着想を得た、車両型のモバイルモジュール(仮称)MINAMISANRIKU フィッシャーマンスパウス」を開発を構想しています。そして、そのプロトタイプを製造を予定しています。

このプロダクトは車両型でモバイル性が高いため、海の家のようなポップアップ的な手法でコミュニティ醸成や経済活動を促すことを想定しています。ハコモノをつくるのではなく、モバイルモジュールが町中を循環し、そこで行われるイベント等のプログラム自体も循環する、そんな「循環」が生み出す非日常空間を創り出します。モバイルモジュール自体も自然資源からできた「自然に還る」建築となっており、多様な面で「循環」を目指しています。

福島県

海とつながるしくみと、海とともに生きる仕事をつくる

合同会社はまから



はまからは、福島県いわき市久之浜漁港を拠点に、鮮魚や魚の加工品販売、遊漁船の釣りツアー企画のコーディネート、子どもたちへの漁業体験事業を漁師・仲買人・加工職人が一体となって行っています。

この地域は、震災や原発事故による影響で、地元住民が気軽に魚を買える場所がなくなり、漁師の担い手も不足しています。

私たちは、常磐の海と魚の魅力伝える様々な事業を通して、この地域の産業でありアイデンティティでもある漁業の衰退に歯止めをかけ、海洋資源を守り、海とともに暮らす人々の豊かさを創ることをめざしています。

作る人と買う人がつながるまちなかマルシェで 自然と共存する豊かな暮らしをつくる

一般社団法人GDMふくしま



GoodDayMarketふくしまは、福島県の福島駅前東口広場で毎週日曜日、作る人と買う人がつながり、農業の現状や食のいまを知るマルシェを開催しています。

福島県は、もも・なしの収穫量が全国上位を占めるなど、果樹の魅力に溢れるまちです。福島に住んでいると、美しい果樹畑も田んぼも野菜畑も、当たり前「風景」になっていますが、それは自然の力と農家の努力、愛情が作り出した福島之宝です。私たちは、マルシェをきっかけに、作る人と買う人が出会い、そこから生まれる会話や農産物の魅力を通じて福島県の自然の豊かさや農業の役割を知ることから、自然と人が共存する暮らしができる社会をめざしています。

2021年3月11日、震災から10年というタイミングに向けて、更に東北内でのチャレンジの活性化と、その自律的持続的な取り組みを支えていくために、私たちは下記の方針で取り組んで参ります。

- (1) 東北オープンアカデミーを中心に、東北内のリーダー同士の学びのコミュニティづくりと、東北と都市部との希望関係人口づくりに取り組みます。
- (2) ローカルベンチャー推進協議会で連携する、岩手県釜石市、宮城県気仙沼市・石巻市、熊本県南小国町を中心に、東北や熊本内に官民連携でのローカルベンチャーを支えるエコシステムのモデルづくりに取り組みます。

本プロジェクトについては、スタート以来、国内外の個人・団体・企業の皆様より大きな関心を頂戴し、2020年3月末現在、ご寄付・助成金等の総額は、1,011,237,282円という多額のご支援をいただいております。この場をお借りしまして、改めて心より感謝申し上げます。

震災から10年という節目に向けて、引き続き東北のリーダーコミュニティを育む取り組みを進めて参ります。

皆様におかれましては、「震災復興リーダー支援基金」のPRへのお力添えをはじめとして、事業連携や各プロジェクトへの個別のご協力など賜りますよう、引き続きよろしくお願い申し上げます。

《ご寄付の受付》

ETIC.は認定NPO法人です。法人/個人ともに、ご寄付は税制控除の対象になります。

<http://www.etic.or.jp/kifu>

連絡先・お問い合わせ先

- ◆NPO法人ETIC.内 ローカルイノベーション事業部（震災復興リーダー支援プロジェクト）事務局
（担当：山内・押切）

東京都渋谷区神南1-5-7 APPLE OHMIビル4階

mail : fukkou@etic.or.jp

Web : <http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/index.html>